

同胞関係と性格形成

—— 自叙伝による一考察 ——

岡 部 弥 太 郎
若 林 忠

I 序 —— 同胞関係の意義

家庭は社会のひな型であるといわれるが、この家庭という社会には大別して三つの上下対等の人間関係の形が見られる。すなわち大人同志の横の関係（通常夫婦関係）、大人と子供の縦の関係（特に親子関係）、そして子供同志の横の関係（主として同胞関係）である。現実の家族関係はこれらの関係が互いに入り組み合い重なり合って極めて複雑な様相を呈している。子供はこうした家庭内の複雑な人間関係を通して次第にその人格の基礎となるべき重要な態度や行動を学びとっていくのである。

子供の成長に伴う人間関係の経験には一般的にいて、まず親子関係ついでには同胞関係そして友人関係という三つの段階がある。親子関係は生後最初に経験する人間関係で、保護者という上下の依存関係であり全てが子供中心である。やがて第2子の出生によって新しく同胞関係が生じる。この関係は長幼の差はあるにしてもあくまでも平等の立場で接触し、対等に交渉しあう関係である。さらに家庭外の世界との接触がはじまると第3段階の友人関係が見られる様になる。これは全く対等な横の関係であり、その結びつきには選択の自由がある。いわゆる他人との関係である。この様に人間関係の経験過程を見ていくなれば、上下の依存的人間関係から対等な横の人間関係への発展であり、同胞関係はこの縦から横への橋渡しの意味をもつ。すなわち同胞関係は社会のひな型での市民仲間であり、そこでは人間同志の共存共栄の経験をもつ。ここに重要な意義が存する。換言すれ

ば、「社会性」ということである。

同胞があることによって子供達がお互いに共に多くの時を過し、子供同志の自然な環境をつくっていく。すなわち大人と共に過す時間が少なくなり、また同胞があることによって過保護や干渉が分散される為に干渉過多などの大人が子供に与える不自然な環境から遠ざかる。さらに、同年輩の仲間との生活は子供に多くのものをもたらす。まずそれは子供を現実の世界へと誘導しその中に引き止めておく。1人ぼっちで遊んでいる子供は空想の世界に安住し非現実的な白昼夢や空想癖にふけりがちである。また子供達はお互いに創造的な興味を刺激しあう。そして二つの精神の相互作用によってより良きものが生み出されていく。しかし相互の刺激作用が当然のなりゆきとして同胞間に葛藤や対抗関係を生じ易くなるがそれは健康で公明正大な競争関係や卒直なエネルギーの発散の方向へ導けば同胞は互いに競い合い奪い合いながらも一方では助け合い愛し合う様になり、このような密接な接触の中から人間関係の貴重な体験を積んでいく。子供は自分の欲求を他人の存在によって制限することを学び、他人の権利に対する正しい理解をもつようになる。ここに仲間関係を基盤とする社会性の第一歩が見られる。

また同胞は自らの姿を映す鏡の役目を果す。子供達は同胞の中に自分を見ることによって自らを矯正し鍛練するよすがとすることが出来る。年長の同胞はしばしば大人よりも効果的で良い教師になり得る。さらに性、年齢、興味、感情の表現や活動範囲などの異なる子供は夫々独自の問題を提示しまたこれらは子供の日々の成長につれて変化していく為に常に絶えざる適応と再適応の必要がある。

すなわち、家庭生活は小さな危機と事件への適応の連続であり、これによって適応能力が習慣として発達させられる。子供達はこの様な家庭内の同胞間の緊密な交渉によって生涯を通じての心の健康の基礎となる安定感、集団所属感、連帯感等を体得するのである。この様に、同胞関係にはいくつもの積極的意義を認めることが出来るが、同胞の存在が直ちにこれらの

意義を有するのではなく、同胞関係を具体的に規定している様々な条件、例えば同胞間の年齢差、男女の性的構成、出生順位、あるいは家庭の社会的文化的背景等によって環境としての同胞関係は左右されるのである。

すなわち子供が生まれると家族の人間関係は複雑になり、特に同胞間においてはその環境の変化とともに両親の愛情を中心として対立競争や反目が複雑多様な姿をとって現われてくる。Flugelの言う様に「きょうだいの互いに対する最初の反応は敵意であり、その愛情は母親に向けられ、初めのきょうだいは単なる邪魔者にすぎない。」しかしながらこうした生活の中から子供は次第に分け合いゆずり合うことを学び、やがてきょうだいとしての愛情に目覚めていくのであって、競争と対立とは幼い時代の同胞関係の基本的なものであると同時に後に発展する同胞間の愛情の基礎となる。

この様な同胞間の愛情は、親の慈愛の共同受用を媒介としてまず形成されるものであって、親への共属関係に於ける同胞の立場は全く対等である。この意味において同胞間の愛情は原則として平等者間の愛である。しかるにその愛情は親の共同扶養における幼時よりの日常的な共同生活と、世代を同じくすることによる趣味、嗜好、体力、能力の類似によって助長され、さらに同じ親からの共同出自の意味が理解されるに至って一層深化されその間には感情と性格の類似が生じる。すなわち敵意と愛情という二つの相反する性質の共存という点に同胞関係の本質的な姿を見出すことが出来る。

この様な特徴をもつ同胞関係は、その人間関係において全ての面で包括的であるゆえに児童の性格形成に影響するところは親子関係にも劣らない。すなわちその生活は時間的にも接触の範囲や緊密さにおいても包括的であり、さらに真からの卒直さを特徴としいささかの偽りも許さない精神的に赤裸々な生活なのである。関係が密接であればあるほどそこには問題も生じやすく又問題は多様である。そしてそれらは子供の性格形成に直接的な影響を与える。そのような同胞関係に内在する問題を自叙伝にあらわれた具体的な例を通して考察していきたいと思う。

II 研究の資料及び方法

本研究の具体的な資料として用いた自叙伝は、岡部が長年にわたってその関係した大学又は短大で、教育心理学、或は幼児心理学等の講義の際、学生に求めて提出させたものの中から、同胞関係について具体的な叙述のあるもの100を選び出したものである。最初から100ケース集めることを目的とし、その際男女同数となるように配慮した。又なるべく色々な環境からケースを得る為に、大学を一つには限らず国立或は私立の5つの大学(内1つは短大)から適当数ずつ任意に抽出した。(表1)

表1

性別	学校名	書かれた年	読んだ自叙伝の数	同胞関係の記述のあった自叙伝の数
男	A T 国立大学	1955	49	20
	B I 私立大学	1957	12	6
	C G 私立大学	1959	60	24
子	小 計	—	121	50
女	D T 国立大学	1955	20	10
	E I 私立大学	1957	20	10
	F S 女子大学	1954	16	9
	G E 女子短期大	1959	30	21
子	小 計	—	86	50
全体	総 計	—	207	100

これらの自叙伝は岡部が学生に自分自身の生いたちを理解させる為に、特別のテーマ或は制限なしに書かせたもので、同胞関係について、どうこうという指示は少しもない。従って全ての自叙伝に同胞関係についての叙述があるわけではなく、100 ケースを集めるには207の自叙伝を読ま

なくてはならなかった。が、包括的な自叙伝に自発的に現われた資料というものには真実性があり、かなり面白いものであると思われる。勿論、そこには自叙伝という一つの枠内での制限があることは止むを得ないが。(自叙伝による研究方法の意義と限界については本稿では省略する。)

表1より考察すれば、男子41・3%、女子58・1%全体として48・3%約半数の者が。その自叙伝に同胞関係について記述している。即ち、約半

数の者は自分の性格は大なり小なり同胞関係の影響をうけて形成されてきたと考えていると言いうる。百分率において、男女の差が大きいのは、一般に女子は男子よりも家庭内における生活が多く、男子は家庭の外に友達を求める傾向が強く、独立心が強い為、自ら外の影響を多くうけているのでこの様なことが自叙伝に書かれる内容にも表われているのであろう。又一部の者は自叙伝の約半分、或は三分の一を同胞関係の問題の叙述に費しているが、大部分の者はその叙述の一部に挿入的に書いており、特に幼少の頃の部分に同胞関係の叙述が多いことは、同胞関係はそれだけで性格を決定するものではなく、他の家族との関係、親子関係、或は学校、友人関係など他の様々な因子とからみ合いながら、性格形成に根深い影響を与えているものであることを示している。又同胞関係は非常に身近かなものであるだけに、そこに特別の問題がない限り意識的に取上げられることは少いように思われる。

性格形成に及ぼす同胞関係の影響を考えるに当っては、同胞関係を単なる家族の構成的条件や形式的環境としてではなく、子供の心理的環境としてとらえなくてはならない。即ち、同胞というものが子供にどのような心理的影響を与え、それに対しどのような適応機制を用い、それ故にどのような心理的行動的特性を形成していくかを、自叙伝に述べられている具体的な例を通して、同胞関係のみでなく、家族関係特に親子関係との関連において、考えていこうとするものである。

しかし、これらの研究を完全にするためには、同胞関係のあるゆる規定条件を考慮し、様々な観点から考察した結果が総合されなくてはならないのであるが、自叙伝という限られた資料のみでは不可能である。従って本研究では、資料として自叙伝を出生順位に

表 2

出生順位	男子	女子	全て
長子	11人	15人	26人
中間子	21人	22人	43人
末子	17	12	29
不明	1	1	2
計	50	50	100

従って長子、中間子、末子の3つに分類し、他の条件は出来るだけ考慮し

ながら考察を進めていこうと思う。(表2, 参照) 尚, 中間子が最も多いのは, 2子, 3子など全てまんなかの子供を含んでいるためである。即ち, 子供は, その出生順位であるが故に家族からどの様な扱いを受け, 又同胞間においてはどのような地位や役割や責任を負うか, それらに適応していくためにはどのような態度や行動を示し, それがどのような心理的行動的特性, 即ち性格を形成していくものであるかということを通して考察し, 同胞関係のもつ問題点を明らかにしようとするものである。

III 自叙伝にあらわれた同胞関係の性格形成に及ぼす影響

性格形成に大きな影響を与える人間関係を考える時, まず最初にあげられるのは家族関係であり, 中でも親子関係と同胞関係が考えられるであろう。これら二つを分離させて考えることは難しく, また子供がふえる(同胞が出来る)ことが親子関係のあり方を変えていくものであるならば, 同胞関係は家庭における人間関係を変化させていく重要な要素であることが分る。このような同胞関係はあまりにも身近であるため, 日常は忘れられがちであるが, 自分の生いたちや性格形成の過程を考える時, 今さらながらその大きな影響力に驚かされるのである。「私は4人姉妹の3女として平凡な家庭に育ちました。私共姉妹の大きな特徴としては, あの有名なオルコット女史の姉妹をモデルにして小説化したと伝えられている『若草物語』にあまりにもよく似ているということです。……こんなことから私はその子の生まれた順位の環境がどれほどその子供に与える影響が大きく, およその影響の定まった流れが存するということを深く感じさせられる。」「私には二つ違いの姉があった。この姉の存在というものが, 幼年時代から現在に至るまで私に与えた色々な面での影響に私の性格を考える場合無視することは出来ない。」一口に同胞関係の影響といっても, それは親子関係と関連した出生順位そのものである場合や, またある特定の同胞の存在のみが重大な影響を与える場合もあり, その性格形成に及ぼす影響は一様ではない。

〔長子〕

長子は最初の愛の結晶として両親はじめ祖父母、親類知己の祝福と喜びの中にこの世に生をうける。彼は直ちに家族の中心人物となり、周囲は大人ばかりで、しかもこの大人達はおおむね寛大で何んでもいうことを聞いてくれる。「長女として生まれた私は、この上もなく可愛がられた。」

「両親、祖父母、叔父の大人ばかりの中に生まれて来たので大変可愛がられ蝶よ花よと甘やかされた。」「長男に生まれたという事実は私が成長していくに必要とされる以上の盲愛ともいえる愛情の温床へ私を閉じこめずにはおこななかった。」このような家族の愛情と保護の中に長子は次子の出生までは一人子として家庭の王座に君臨するのである。家族の大人達に愛されたという記憶は長子の殆んど全部の者が述べていた。また若い両親は子供の養育には経験がなく不訓れである為、神経質的に手をかけすぎたり、甘やかしすぎたりする。「母は初めての子なので赤ん坊が頭を横向きにして寝ることもヒヤヒヤして大切に育てた。」「最初の子のため培菌一つ入ってはと……」その子が早産児や虚弱児であればなおさらであり、初産の子には虚弱児が比較的多いのである。「幼児の疾病は凡て私の体を通じた。従って両親の可愛がることは一通りではなく、それに長男ではあるし、文字通り溺愛であった。」このような時に祖母でも同居しておれば、孫可愛さに、又若い親の頼りなさに必要以上に長子を甘やかしたり、或は長子の養育の主導権を握りいわゆるおばあさん子が出来ることがもある。「初めての子のせいか祖母の溺愛の中に成長した。5つ6つになっても朝起きる時も夜ねる時も一切祖母が私の面倒を見てくれた。あたかも裕福な家の『お坊ちゃん』に対する乳母のようにどこにいくにも祖母がついてきた。」「祖母は私が厳しい母に叱られた時の避難所だった。」このようなことから祖母と母との間に溝が出来、子供がその中に立って苦しむようにさえなる。「祖母と共に寝起きし、食膳も彼女の隣に座り祖母の口移しで食べたことを覚えている。母に叱られた時でも祖母のところへ泣いていくと暖かく慰めてくれた。『そないにおばあちゃんがええのやったらおばあちゃんの子

になりなはれ。おかあちゃんには知らんさかいに』祖母を慕う僕に対して、また長男を可愛がりすぎる祖母に対しても母は不機嫌であったように思われる。」

大人にちやほやと甘やかされて育った長子は一般に依頼心が強く、自分の望みが叶うことが当たり前のように我儘勝手に振舞う。「小学校入学まで一人子で我儘に育てられ、自分のことを自分ですということはあまりなく、周囲の人が何んでもしてくれる状態でした。そして何んでも人に頼って、何か嫌なことは人がしてくれるという観点が頭の中にあったようです。」そして常に自分は家族の中心人物で大人達の注意をひいていなくては気がすまず人の顔を伺ったり、御機嫌をとることも覚える。「その頃から人の気持を察するのに敏感だった。どんなことを言うと大人達が笑い出すかを考えてそれに合う様に振舞い大人達が笑うのを見て満足に思ったこともしばしばだった。自分の存在が認められたという気持の現われだったのかも知れない。」溺愛と保護の中に居心地よく安住している長子は積極的に外に出て他の子供と遊ぼうとせずまた遊んでも自分に危害を加えず、やさしい年上の人や、女の子の仲間に加わることが多い。従って、社会性に欠けるところがある。「遊び相手に不足なく泣けばすぐ抱いて甘やかしてもらえる周囲の中で消化不良を心配されながら成長した。従って小学校へ入っても引込思案で小心中で友人も少く、女の子とばかり遊んだ。」「祖母が従姉妹だけとしか遊ばさなかった。……我儘で小学校3年までは友人も出来ず、自分にままならないことには反抗的であまのじゃくだった。」子供同志の対人関係の経験の殆んどない長子は幼稚園や小学校という新しい社会に入っていかなばならなくなっても大人への依頼心からなかなか独立することが出来ず不安や恐怖を感じ、それに適応していくには大きな努力が必要である。「内弁慶のくせに毎朝母の手にひかれて幼稚園に行き、母が帰ろうとするとすぐメソメソ泣き出すという仕末におえない意気地無し甘ったれであった。小学校に入学しても私の甘ったれはどうにもならず『宿題がやっていない。』とか『遅刻する』とかいって毎朝ベソをかい

て……」。「最初の社会の拡大すらが私にとっては非常な不安だった。私はどうしてもその五、六駅を一人で通学出来なかった。」家の中で溺愛された者ほど社会的適応は悪いようである。すぐにその社会になれ、友達と交わっていける子供もあるが、なかなかなじめない子供には先生や家族の適切な指導が必要であろう。しかし、親が子供の教育にとって良いと思ってやる事が子供に満足を与えないばかりでなく教育効果のない場合もある。「私は初子として父母に非常に大切に扱われた。だから僕が弱虫になったのか或は本質的に弱虫だったのかおそらく相互作用だろうが、とにかくこういう両親の育て方は、祖母の『家宝』の何倍かの力で私の性格を弱くした。私は現在になってこういう両親の育て方に疑問をもたざるをえない。」ということになる。或は甘やかしてはいけないとあまりにも厳格にしすぎて子供の自由に伸びようとする力を抑えてしまったり、反感を抱かせたりすることもある。「何をするにも親の厳重な監督をうけた。そのため良かったと思うこともあるが、後々まで怨むようになったことも多い。例えば神経質で臆病で陰性なのもそのためである。」「こうした私をどうにかして厳しく育てようと母はスパルタ教育を行った。幼稚園を途中で逃げ帰った私をつれ戻しては近所の林の中につっこんで叱る。嫌だ嫌だと泣き叫んでいた私は母の背に負んぶされている妹を羨やんだ。母は今になって、あんな嫌がるものを無理に連れていかななくてもよかったのにと後悔している。そのためか次女、三女はこの点に関しては全く自由に育てられた。」これらは殆んど両親の弾力性のない教育態度や教育経験の浅いところから生じるものであって、この点長子は次子以下の教育のテストケースにされるという損な面もある。

さて、1人子として家庭の王座に君臨していた長子にも危機が訪れる。次子の誕生によって必然的に退位を余儀なくされるのである。彼は以前ほど皆んなにかまってもらえなくなり、自分のあり方を改めて考えなおさなくてはならなくなる。しかし、まだ経験も浅くものごとの分別もつかぬ子供ではただその事態を漠然と受け入れることにもなろう。「弟が生まれて

から両親が自分をそっちのけにして弟のみにかまっているのをいつも淋しそうな思いで見ている。「小さなお姉さんになったわけであるが今までの生活が全部私中心だったのが妹にとられ注意が少なくなったのが子供心にも分ったので何か面白くなくつまらない日を送った。」しかし、両親の教育が適切だったり他の家族から十分に愛されている場合は素直に新来者を受け入れむしろ珍しい者に対する期待と新しい遊び相手の出来る喜びに満される。「この私にも弟が出来た。今まで私一人が独占していた父母の愛情は2分されることになった。しかし、当時の私には愛情の独占欲などなかったと見える。ただ小さな赤ん坊が珍しく、触ってみては母に叱られた。というのも祖父母の一方ならぬ私への愛情が私に嫉妬などというものを忘れさせていた。」「母の側に寝ている猿のように真赤なものは人間とは思えなかった。弟というものが出来て嬉しかった。のぞきに行っては頬をつつついたりきっちり握りしめている手を無理に開けようとした。」

第2子の出生を喜んだ者は勿論、それに嫉妬を感じた者も次第にその事態に慣れるに従って、弟妹と遊ぶ楽しさを味わい、又自ら兄姉らしい振舞をする様になる。必然的に或は自発的に年長者としての責任や役割が与えられ、そこから兄姉としての意識をもち始める。次々に同胞がふえた場合はなおさらである。「兄弟3人となり母も忙しくなったので以前ほど細く面倒を見てもらえなくなりましたが、姉という気持が強くなってきて、甘える気持はなくなっていき、弟をかばったり、可愛がったりする気持が芽生えてきました。」「私はもう1年半位で小さなお姉さんとして自分のことは自分でさせられた。」このように今まで自分が大人達に依存していた状態からむしろ弟妹に頼られる立場になってくる。特に疎開やその他の事情で子供達だけで親元を離れた様な場合は弟妹の世話は年長者の肩にかかり兄姉としての責任は自ら高められる。「もうこの頃は1人前以上と思う位の考えも出来て母と2人で家の心配をした。母と同じ様な気になって弟達を叱ったり、全く1人前のつもりで振舞い、今思うと不自然な位大人びた所がありました。」「女学校1年の時子供ばかり4人で叔母の家へ疎

開した。私が洗濯から縫物、食事以外のことは全て妹達の世話をした。自分も大人になった様な気がした。」しかし、必ずしも凡ての子供がこの役割を喜んでひきうけているのではない。「祖父の病気に母がつきっきりで弟が3人もいたので自然弟達の世話、それに学校のこと家事は嫌でもふくれっ面をしてしなければならなくなった。学校から帰ると先づ弟のおしめ洗いが待っていた。私は裏の小川の辺りから聞えてくる遊び声にこっそりぬけ出したが、すぐ見つかり呼び戻された。遊んでいる人の母が羨やましく、自分のは継母だと思い病気になりたいとも思った。しかし母はこの時の私を大変可愛相でいつも涙を流していたそうです。これを知ってから私は命令されなくても何んでもするようになった。」遊び盛りの子供は時には不満をもったり、親や同胞を憎んだりする様なこともある。このような場合親の指導が適切で子供に事情や親の気持をよく理解させておれば良いが、そうでなく親がその行為の意味を十分に認めてやらねば親や他の同胞との間に溝をつくってしまうこともある。「よく使い走りさせられたが、別に大した苦痛とも感じず今から考えても他の友達がよく遊んでいる時に自分ながらよく我慢をして親のいうことをよくきいたものだと感心している。ところが、弟達と喧嘩した時に明らかに弟が悪いと分っている時でも、父からすぐに『大きい者が悪いのだ。』と行ってピシャリとやられ、『これほど家の手助けをしているのにこの野郎奴』と腹がたったのを覚えている。この父親に対する感情が後々までも続き、真にうちとけて話す気持になれなくなった。」又あまりにも兄弟意識が強く弟妹がいるのだから自分は親に心配をかけてはならないと思ひすぎ、我儘や心配事を親に話さなくなったり、弟や妹の手前遠慮することもあり、何も言い出せなくなったりし、このようなことが、積み重なって内向的な性格をつくっていくこともある。「疎開……5つ6つだったがずい分しっかりしていた。とにかく下に小さい妹弟がいるのだからと母に迷惑をかけてはいけないということが頭にこびりついていて。この時期に二つの性格が出来た。それは親に迷惑をかけないということと、私は大丈夫、自分1人で何んでも出来ると

いう自信である。この性質のためいつも親の立場を考え無茶なおねだりが出来ない。また何んでも自分で解決しようとして親には自分の思っていることを少しも話さない子になってしまった。」

常に年長者として追従していく様な同胞のない長子は、自分で道を切り開いていく努力をせねばならず一種の開拓者としての苦勞をなめることもある。「母は文盲だし父は勉強を見てくれなかった。自分一人でやらねばならず皆は兄さんや父さんに聞いて教えられてくるのに私は先生が唯一の頼りだった。予習には苦勞をした。」また気の弱い意気地のない者は卑怯な行動をとることにもなる。「長男だった私は友達と遊ぶ時に何か争いをして助太刀を頼むべき兄貴がなかったので、弟をわざと笑い者にして餓鬼大将の気に入るようにした。」

時には喧嘩をしたりいじめたりはするが、とにかく、年少者でも同胞があるということは、心強くまた楽しいものである。「性格が正反対なので日に1度は必ず喧嘩はしたが、心の底では私は、弟が好きだ。」しかし、又、年少のまだ分別のつかない弟、妹が側にいて、いたづらをしたり、さわぎまわるのも度がすぎればうるさい存在になり、遠避けたくもなる。特に思春期の、もの想いにふけったり、孤独と親しむ頃には自分の周囲に壁をつくってうるさい者をよせつけなくしたり、弟妹の行動にかんしゃくを爆発させたりもする。「自分の心を感傷的な言葉でノートに書きこんだ。それを読んでしまった妹は母にそのまま報告した。精神的なことは何んでも心にしまっておく習慣だったし、思春期の不安定な感じやすい状態にあった私は、すごいショックを受けた。それ以来妹は警戒の的となった。」

弟妹の出生によって、甘えられる地位を奪われた長子はそれに不満を感じたり弟妹を羨望し、根強い嫉妬をもつこともあり、それは弟妹達の行動の批判となってあらわされる。「5年生の時にもう1人妹が生まれた。今5年生だがその贅沢さはあきれ程だ。何もない中を工夫して、遊んだその頃の私がどんなに楽しかったか、毎日あき足らずブウブウ言っている妹に教えてあげたい。」

同胞の中では先輩格であり、同胞中で最も卓越することによって親の信頼と関心を集め、又同胞の尊敬と長子としての権威を保つことによって失われた家族の中心的地位の回復を図ろうとする長子は、同胞に対してもまた学校においても常に人よりぬきん出ようとし対抗意識や競争心をもちやすく、これに伴う嫉妬心をもやすこともある。「負けず嫌いで常にクラスで1番で中心人物でなくては気がすまなかった。私がコツコツ勉強しても母は特別ほめてくれなかった。この次こそ、この次こそと思う気持が、私を負けず嫌いにしたのかもしれない。」「おませでなく大きくなっても人より賢いのだということを見せてやろうと秘かに闘争心をもやした。今でもそうである。」特に弟妹がすぐれた素質や能力をもっている時の嫉妬は根強く永続的である。弟妹の出来ないことで卓越しようとしたり、美貌の妹を羨やんで整形手術をうけた姉などの例もある。このように積極的に競争心を燃す者もあるが、逆に消極的に引込み思案で孤独になっていく場合もある。こんな場合は何か、長子だけが出来ることをつくってやり、それを十分に認めてやることも必要であろう。「すぐ下の弟はひどく身が大きいいたちなので彼の方が大きくなってしまった。腕力でひげ目を感じ万事当らず障らず消極的に行動した。気が弱く神経質でほしいものを『くれ』とはっきりいえなかった。自分の考えていることを人に相談出来ず1人煩悶するたちで本能的に自分の心の中を露すまいとした。学校では先生のいうことをよくきく良い生徒だったが、先生に対する親しみもなく孤独だった。」

さて、様々な経験を経て形成されてきた長子の性格は一様ではないが、一般に指導性を有して負けず嫌いである反面、内省的で苦勞性や神経質なところもある。また家庭では同胞中の最年長者としてそれ相当の権威をもち、尊敬をはらわれている長子は、しばしばそれを家庭外の対人関係にもちこそうとすることもある。従って広い社交性を示し、ガキ大将になったり、優等生となって指導力を示したりすることもあるが、自信家すぎたり、逆に失敗を恐れて慎重すぎ引込思案になって社交的適応がうまくいかなくなる場合もある。

〔中間子〕

中間子には生まれた時からすでに年長の同胞がいる。彼は中間子を自分の愛の独占を脅す競争者とみなす。同胞関係は親の愛を中心とした競争と対立から始まるのである。次子は長子があるため親の愛を全部独占することは出来ない。親も子供の養育に経験をつみ赤ん坊も珍しくなくなったので必要以上に抱いたり甘やかしたりはしない。又次子が親の愛を意識し始める頃には新しい赤ん坊が誕生し親の注意はその方へ移っていく。「妹が生まれると私の家庭における地位は一変した。両親の興味は私から妹へと移り勝気な私が嫉妬心をいくらもやしてもなしのつぶてに終わった。」「毎晩母の側に眠りたいと悲しいほど熱望した。けれども夜中にふと目を覚すと私と母との間には弟が小さな体をふんばってすやすや眠っていることが多い。」親は凡ての子供を平等に愛しているつもりでも小さい子供ほど手がかかり実際には上の子供まで手がまわりかねるのである。長子は同胞中最年長者というので特権や権威をもち指導権をもつ。親もその様に扱う。又末子はいつまでも親の愛情と注意や保護の下にある。この間にあって中間子は何の存在意義も認められないように感じ易く孤独な不安定な位置にいる。従って、中間子の愛されたい認められたいという意識は強くなる。「父は子供をあまり可愛がることはなく、抱きあげたのは最初の姉と最後の妹だけであったようだ。又母に対してもあまり抱かれたという記憶はない。最も記憶出来る頃には弟が生まれ、僕にかまってくれなかったせいだろう。時々母のひざの温みの記憶のない自分をふと淋しく思う時がある。」「末っ子の弟は家中の中心だったようである。長女でも末っ子でもない私は一向に人に愛された経験がない。といっても別に嫌われたという記憶もないが我儘で虚栄心の強い子供に時々人に可愛がられたいと望む心が強く頭をもたげる。」「弟は甘やかされて可愛いが多くの特権を持っていた。第1いつまでも弟だけが母の蒲団にねることが私には嫌で嫌でならなかった。私はいつもやさしい可愛がってくれる人を求めている。」そして自分に少しでも家族の関心を集めようとして自己主張を強くしたり、わざ

と注意をひくような行動をとったり、或は何かにおいて他の同胞より優れようとして努力する。「家にあっては一番我儘で強情張り、一度言うとその結果が分っていても決して後へひかない。又始終妹をいじめてばかりで母の頭痛の種だった。」「家では相変らず注意を払われない子で成績をもらった時だけ『点の良い子』といわれた。それによって少し皆の注意を集めることが出来た。この状態に適応していくために3枚目的役割を演じだした。この偽った陽気さはしばしば軽蔑の念をこめたオッチョコチョイと呼ばれたが、意外に学校でも家でも好評であった。まるでピエロのようだった。」「人に嫌われることを恐れ、人に好かれる方法をいつも幼い心で考えていた。」「私の喜びは試験の答案が上出来で皆の前で先生に名前を言われることにだけ集中した。学問に憧れた。心は孤独と悲しみに満ちていた。」

このように愛情に対する欲求不満や愛を求める叙述は中間子の自叙伝の半分以上に見られた。長子や末子には殆んど見られなかったものだけに、ここに中間子の性格形成の基礎があるように思われる。この中間子の心理を理解し家族の者が愛し認めてやれば自信をもって成長していくことが出来るが、適切な処置がとられなければ愛情に飢えたひがみっぽい利己的な性格や、愛されることのみ執着し他人を愛することの出来ない自己中心的な性格が形成されていく。「私は子供の時から甘えたという気持は全くない。私は現在に至るまで肉親に対して憎しみを感じたことはあっても愛情を意識したことはない。20才になったのにまだ自己愛の域を出ないのかと恥しく思うが、まだ自分が他人をつつむだけの母性的な広さをもつに至らないのだろう。」「少女時代の願いは何よりも温かい優しい母が欲しかった。愛がどんなに偉大なものか知っていた。子は激しく愛を求めた。理想化した友を全霊をあげて慕った。愛する人のまわりにつきまとい排他的に2人だけの世界を築こうとした。そして満されない想いを抱き、また次の愛の対象に移った。心から愛する人を持たなくては淋しくていられない病的な孤独感はどこから生まれてきたのか。立派な人になりたい。知性的な人、たえず成長を続けていく豊かな精神をもった、しかも限りなく優しい

母になりたいと願いつづけた。」幼い頃の愛されたという経験がどんなに重要かよく分るような気がする。しかし、中間子のすべてが愛情の欲求を十分に満されていないというのではない。彼等の中にもその誕生を喜ばれ、甘やかして育てられるものもあるが、多くの場合は長い間弟妹がなかったとか、上とずい分年が離れていたとか或は、1人娘やあととり息子等で完全な中間子というよりも長子や末子の性格をもつものである。「私の後は妹がずっと後になってから生まれたので両親の愛はほぼ私が独占してかなり我儘に育った。」「弟とは4つ違いであるため私は兄弟中で最も甘やかされて育った。数え年5つまで母の乳を離れず、朝枕元へお菓子がおいてないと駄々をこねた。自分の欲望が満されなければ駄々をこねるという性質は後々まで続いた。」十分に親に甘えたという経験や記憶のある者は後に同胞間で親の愛情を中心に競争や対立が生じてもそれは永続的なものとはなり難く、子供の性格の中に深い根を下してしまうということはないようである。

中間子は親に関心を持たれる割合が少いだけに欲求不満が生じる一方、親に干渉されることも少く自由な行動をとることが出来る。きかん坊、あばれん坊等は中間子に多い様である。このような行動は自己主張のためとも言えるが、目に見えぬ圧迫からとび出したいという欲求の現われでもあろう。勝気な者に多いようである。「私は生まれた時から色が黒く、その上父母が兄にばかり注意をしていたので私は野育ちに育った。ずい分いたずらもし兄弟の中で一番多くのエピソードをもっていた。」「次女というハンディキャップは今でもつきまといっている。勝気で負けず嫌いで人に頼まれることの嫌いな性質は幾分こうした事に原因しているらしい。姉がいたにもかかわらず姉と遊んだ思い出は殆んどなく、近所の年上の子供達との思い出ばかりである。相手が年上でも負けておらずかえって威張っていた。」「勇ましく男の子のようだった。姉が私に隠れてお人形ごっこやままごとをしていた。私は何んでもみんなかきまわしてしまうからである。」「いつも何か人を『アッ』といわせるようなことをしたかった。」

上に先輩として頼ることの出来る長子がいるため中間子は彼を見習うことによって、大した苦勞もせず多くの事を覚える。幼稚園や学校なども長子が先に入っていて開拓してくれているので全く未知の世界ではない。したがってあまり不安も感じず自信をもって外の社会へ適応していくことが出来る。またよく知っている為にはボスの存在となったり、かえってつまらなく感じることもさへある。「待望久しくして幼稚園に行きはしたが、兄姉をもってものごとを早くから知っていたためかその内容をつまらなく思った。」「学校ではボスの存在となり高慢でクラスの人からは意地悪と思われていた。」「家にある本という本は分っても分らなくてもむさぼり読まれた。多くの本と姉達の良き環境の下で異常な速さで成長していきましました。」次子以下の進む道は多くの場合、長子によってすでに開拓されておりそこには一応の規範も出来ている。親達も一度経験したことを十分に生かして後の子供達は要領よく、合理的に導くことが出来る。しかし、彼等がこれに甘んじて、常に年長者に従い、彼等の保護の下についていくなれば気の弱い依頼心の強い、非社交的な社会的に不適応な性格になりやすい。「幼稚園も姉が卒業すると自然とやめた。1人ぼっちで少し遠い幼稚園へ通うのが恥しがりやの私は嫌だった。家では我儘、いじわる、泣虫と何んでも悪いものは一身に背負っていた。」「何んでも姉と同じでなくては気がすまずいつも2人一緒であった、今だに姉と別に1人で知人の所へ行ったりしたことはない。従って社交的なことは一切姉にまかせ、私はいたって非社交的になってしまった。私は姉に甘え頼るようになり、自分でも批判しなければいけないと思うようになったがもう批判の能力を失い、また自分の意見もなく心苦しくなった。」「兄は私にとっては最初から常に大人であった。だから兄のいうこと教えてくれることは凡て無条件に正しいと思って受け入れた。家の中ではともかく、外では非常に気弱でいわゆる弱虫だった。」「兄のお下りは何んでも私達の大事なものとなった。」「兄への私の依頼心はなかなかぬけきれなかった。」しかし又、自分よりも豊富な経験をもち、全てに勝る兄姉が存在することはしばしば経験の浅い者や

自分の思うままにやろうとすることの圧迫や障害となることもある。又長子は特権や権威をもっており、これを弟妹に対して振りまわすことさえある。「小さい時の僕はしょっ中メソメソしていた。打たれるまではいかなくても自分の主張が入れられないとすぐ涙がたまってくるのだ。鼻をツーンとさせる材料を提供するのはいつも兄と姉であった。つい最近までこの兄と姉を心憎く思っていた。」「昔気質の家では長男である兄には一種の特権ともいうべきものが種々与えられていた。こんな私は幼年期低学年時代を町の良家の子供として送ったが兄だけ大切に作る家の態度には子供心ながら反発した。凡て兄の意のままになっていた。」「以前はよく遊んだが入学すると殆んど遊ばず予習復習をきちんとして学期中に優等生になった。姉が小学校入学以来ずっと級長をしつづけ、休み時間等に先生と共に騒ぎまわっていたので無意識ながら圧迫感を感じていた。」彼には以前から姉との間に親の愛を中心とした葛藤があり常に姉と対立していたのである。兄姉によって残していられる前例や規範はしばしば弟妹の大きな迷惑となる。家庭でも学校でもその前例は全て弟妹の行動の規準であり物差しとなる。両親には兄姉と比較して文句をいわれたり、先生や他の人たちからも比較の対象となる。もともと兄姉より勝れた者はそれ程苦しまなくてもよいが、兄姉より劣るといわれたのは、努力を強いられそれでも親や先生達の要求水準に達しない場合には劣等感や厭世感をもつようにさえなる。又このような前例は弟妹の進学や将来の志望や進路に対しても様々な制約を与える。「5年になってスパルタ教育のオーソリティーの先生の受持になった。姉はスパルタ教育のよろしきを得、非常な優秀な生徒であった。それは私にとって全く迷惑だった。『私はそれほど優秀ではございません。どうぞ姉と同じように見ないで下さい。』といつも情けない心配気な顔ばかりしていた。姉がよく『恥さらしをしないでヨ』というのでボロが出るのを恐れた。」「姉達が大学へ行っていないので大きな障害となった。姉達のあてつけがましい振舞の中での受験勉強は一向に進まなかった。」「大学受験の前の父は『上の2人は大学に行っている。それなのにもしてお前を大

学へ通わせなかったら将来いつかお前が困ることがあったとき、お父さんは私だけを大学へ通わせてくれなかったといわれるのは嫌だ。だからどんなことがあっても大学へ行かねばならぬ、それからは自分の好きなようにやればよい。』といった。これに対し私は全くどうしようもなかった。」

「1学期に一度行われるガイダンスの個人面接が私には不愉快でならなかった。先生は興味深々といった顔で『お姉さんとは大分違いますね。』といって笑う。先生にはこの性格の全く反対な姉妹を観察することが心理的に面白くてたまらなかつただろう。けれど私はそういわれると何か侮辱されたように感じて腹が立った。姉の性質を羨しく思い自分を少しでもそれに近づけようとしていたからだ。私は自分というものに極端な劣等感を抱いている。人にはもっと自信をもてといわれるが、自己嫌悪にかられて、自分のことを考えるのも嫌なのだ。」常に姉にくっついて行動し、他人からは比較の対象とされてきた妹の悲しい心境である。

中間子には兄姉のみでなく弟妹がある。したがって姉妹に追従あるいは対抗するのみでなく、弟妹に対しては先輩らしくなくてはならない。これは周囲から要求されることでもあり、また兄姉の圧迫をうけることの代償になることもある。「弟が生まれた時より後、駄々をこねると『あら丁子さんはお姉さんになったのでしたね。お姉さんは泣かないわね。』と母がいうと声を出さぬようにしようと口をゆがめてこらえた。この頃から自分を抑えるように育てられ、おとなしくしていることが立派であると自分で思いこみ始めた。」

「2つ年下の妹があるが、いつも私の後にくっつきまわっていた。この妹をよく女中ととり合いして可愛がった。」

「小さい頃の私の妹のいじめっぷりはすざましいばかりであったが、小学校6年を境にふつりといじめなくなった。その反面今度は猛烈に妹に対して心遣いするようになった。どうしてそうなったのかその辺の事情は強く意識に残っていないが、とにかく妹の身を気遣うのは一通りや二通りではなかった。妹が1人で出かけると帰ってくるまで気もそぞろだったし、一緒に出かければ必ず手をひかねば歩けなかった。私自身そうやって妹の世話をするのはひ

どく負担ではあるが反面なんとなく嬉しいのである。」しかしまた弟妹の方が勝れている場合はしばしば中間子は威嚇を感じ追いつめられたような圧迫感や劣等感をもつ。まさに上と下から板狭みになる。「月日がたつにつれて弟を目の上のコブとして敵視するようになった。勉強するにも背を向けてであった。競争意識が兄弟意識よりも先に来た。浪人中に二つ違いの弟が追いこしていった。目に見えて大人びていた弟は脅威であった。」

せめて弟妹に対しては兄姉らしく優越した地位を保ちたいと思っている中間子は家庭においても外の社会においても弟妹と同じ扱いを受けることを嫌がる。常に背のびをし兄姉に近づきその仲間入りをしようと努力する。しかし、その要求が入れられず、欲求不満を起すことが多い。「姉と喧嘩すると『妹のくせに何んです。もし集団疎開したらお姉さん1人が頼りなんじゃありませんか。』と叱られ、妹とすれば『お姉さんのくせに小さい者と一緒になって張り合うなんて』と叱られた。気の強い私のことだからきっとずい分無理も言ったのだろうが、私はいつもどっちに対しても悪い子にされていた。家ではいつも子供として扱われ、何をするにも妹と一緒に決して姉達の仲間に入れてもらえなかった。その点姉だって私以上に子供っぽいこともあるのだが。姉達がオペラや芝居につれていってもらった時も妹と留守番だった。しかしそれほど羨しいくせに『私も連れてって』とはいわなかったし、又いえる雰囲気でもなかった。」「年上と年下のグループに分かれることが多かったが、下のグループに入るのが嫌さにいつも背のびをし、おしゃまな子になった。……自己意識の最初の自覚が自分よりも小さい者に対してことごとく優越性を覚えさせた。」「兄と私の間には石の台が置いてあって私には上れない。どこへ行くにも上の3人は出かける服を着て父といそいそ行くのに、門の際で私だけぐいと母に手をひかれ涙をのんで見送るのである。『不当だ、差別待遇だ』3才にしかならない私に、こんな気持が秘んでいたのである。……こんな家にはつまらない。『つまらない』が私を外に行かせたのかもしれない。」

上と下の板挟みの地位にある中間子は、同胞間においても常に上下2つ

の長子・末子等より複雑な人間関係の経験をすることになる。したがってその適応の仕方も様々で性格形成の過程も複雑である。今まで自叙伝の叙述を追って考えてきたものをあげても、常に兄弟に追従していて気弱な、依頼心の強い、独立心のない意気地なしになる者、兄弟に追いつきこれを抜かんとするが常に彼等に圧迫されて欲求不満である者、その欲求不満を外で発散させてボスの存在となる者や読書や思索などにふけて自分の感情を表に出せない内向性になる者とがある。又自分の満されない気持を弟妹いじめや、逆に弟妹を溺愛することによって補償することもある。いずれの場合にも親の愛に対する不満とそれに伴う同胞への羨望、憎しみ、嫉妬等が内在する時は心底から好意をもって親や同胞に打ちとけることが出来ず、常に愛情の欲求不満をもち表面はうまくつくろっていても心の中では意地悪で陰険でひがみっぽい根性をもち、家族に対しても非協力的な子供になってしまうことがある。

〔末子〕

末子は生まれた時すでに年長の同胞が存在しているというところは中間子の場合と変りはないが、下に同胞がないために親の愛を新来者に奪われるということがなく、いつまでも赤ん坊として親に手をかけられ甘やかされて育つ。親の方も他に特別手のかかる子供がいない限り、いつまでも赤ん坊のつもりで色々干渉し保護することから抜け出せない。特に長い間子供が出来なかったところへ生まれてきた場合などは、親が老年になっていることも手伝って、とかくその養育には厳格さを欠きがちである。また親と同様に兄弟達もまるで人形か玩具のように扱い世話をやくこともある。このようにして育てられてきた末子は我儘で依頼心が強く独立性を欠きいきおいスポイルされやすい。そして我儘に振舞うことが当然のように思われて、それが性格の一部になってしまえば、大きくなって広く社会的な対人関係において支障をきたすようになる。「1番下の姉とは6つも年が離れているので、家中の人は常に私を中心としていた。」「家族の愛情を殆んど一身に集めて何不足なく素直に応揚に育ちました。学校へ行くまで

は決して1人で放り出されていたことはなく、近所の子供と遊んだことは殆んどなかったようです。」「末っ子の私は両親から特に可愛がられ自分でもそれを意識しつつむしろ当然顔で我儘に育った。そのくせ一たん外に出ると意気地なしで…。」「家の中ではいつまでも子供として可愛がってくれるので自分でもそのような気がして精神的発達がなく一層独立心を失ってしまった。自信を失い他人が良く見えてみじめな気持になる。」「我儘一ぱいに生活し絶えず回転するものの中心にいたというのが逆に成長してからかなり困った性質の一つとなったことは否定出来ない。」

甘やかされ我儘に育った末子は、社会に出て苦労してから初めて自分の生いたちをふり返り、反省したり、時にはこんな自分に育てた親や周囲を恨めしく思うこともある。「私は大きくなるにしたがって、この末っ子であり男の兄弟がいないことがたまらなく嫌であった。私の少年期から青年期を通じての精神的主題はこのことであった。すなわち『甘やかされた者』『お坊ちゃん』という烙印から少しでも逃れんとしたのである。」「我儘で傍若無人であった一方、母の激しい、時にはおしつけがましいほどの心遣いが、またそれにともなう母の私の私生活の詮索ぐせと好奇心のために、私の自然でおおらかな性質を萎ませるところがあったと思われる。…極度のてれやで人並はずれた羞恥心をもっている。」

しかし凡ての末子が親の愛を一身に集め、家庭の中心になって甘やかされているのではない。同胞数が多かったり、母が病弱だったり、また他に特別手のかかる同胞がいれば、母の手は末子までとどかない場合も多い。「私が小さい頃は女中の手一つにまかされていた。近所の人は私のことを『家の居候』と呼んでいた。」「長男は私より7つ年上であり、これがまた子供の時から病弱で一手に母の愛情を奪ってしまっている。毎日々々の生活はあたかもどこかの王子とかいった感じを抱かせた。私やら次の兄貴のごときは『弟のひやめし』というのが如きで身体も大きく長男に比較すると話にならぬほどの健康の持主である。このような生活は子供心にも何とかして母の愛情を得たい、誰かの気持を得たいという姿に変わっていった。そ

んな時に使う仮病の腹痛も数を重ねるにしたがってその効果もだんだん薄らぎ、ただ女中の手で育てられていった。」

家庭において年長者ばかりの中で成長していく末子は、自然おしゃまな早熟な子供になりやすい。また、分別もつかぬ小さい子が大人の中で無邪気に振舞う事々に大人達は喜び、末子をおだてることもある。彼もそれを意識し増長したり、大人の顔色を伺って、気をひく様にふるまう、彼は家庭の団欒の中心でありエピソードメーカーである。このように育てられた子供は一般に家庭においては人見知りをしない明朗な子供であるが、一旦自分に愛情が向けられていないと知ると極度の不安や嫉妬を起すことがある。「家に帰れば家中の中心人物のように学校であったことを語った。」「大人の中で育った私は3つ4つの頃まではものすごくおしゃべりで大人の口をきいたり人真似をしたりして1日中人を笑わせるおしゃまな子だった。」「どんな人とも素直に臆することなく話した人の感情に敏感でしたのでどうしたら相手を喜ばすことが出来るかもちゃんと心得ていて、人の感情を傷つけることなく応待しました。…しかしいつでも相手の好意を感じると自由に思うままに振舞えるがそうでないと人1倍みじめな気持ちになるという性質……。」

家庭では大人を相手にちやほやされながら育ってきた末子は幼稚園や小学校に入って自分と同じ様な子供と交際しなくてはならなくなった時、どのようにしてよいか分らない。家の中でのように我儘な振舞いは許されずそれかといらて自分が他の子供のリーダーとなることも難しい。したがって自ら引込思案や臆病、恥しがりなどになり他の子供と対等に交わっていけなくなる。このような時、同じ学校に兄弟があれば彼等に依存的となり、またいない場合でも親や大人に頼りがちである。次第に社会生活になれて、依頼心や我儘がなおればよいが、こんな時またも大人達が干渉や保護をすればいつまでも独立心のない意気地なしの子供になる。「私にも別の世界が開けた。初めは大人の方がよっぽど扱いよいと思った。」「私は姉兄達について幼稚園へ入った。ここではじめて他の子供達と交わったが、

私は付添いの者にしっかりつかまり黙って立っていた。人の前でする行動は何も出来なかった。……学年をますにしたがって交際家になっていったが、我儘に母の愛を一人の物のようにしてきた私であったから、友達に対しても独占欲が強かった。」「友達は一人も出来ず毎日皆が僕に意地悪しているようで始めのうちは学校が終るととんで帰って母や姉にとびついた。」「家の外では大変恥しがりやで他人と別な人間に思えた。他人は皆、心かとけあっていて自分一人がのけ者にされ、私の前では他人は申し合せたように私の分るような言葉を使うが、他人同志では全く別の言葉をつかうか、黙っていても意志が通じ合っているように見えた。他人や他の子供とは遊ばず1人で遊んだ。幼稚園も母にくっついたままで中退してしまった。」「学校での私と家での私とは相反する2面性をもっていた様に思う。個人の殻に閉じこもりがちな面と、開放的で積極的な面と。」

家庭において最も年少であり、身体的にも精神的にも弱い末子は、その同胞関係においても年長の同胞から競争相手として対抗意識をもって見られることは少く、むしろ保護され可愛がられることが多いようである。

「兄は本当にやさしい私の小さな保護者であった。末子の私は独立心を失い、意志が弱く気が小さいことに気づき、女学校頃大変苦しんだ。」「兄姉に真底から惚れぬいてべたべた甘えてくっついていた。」時には兄姉達が自分達の満されなかった愛情の代償に末子を玩具のように扱い可愛がることもある。「姉は私を人形のように扱い、宿題も全部自分でしてしまい私を飾りたてるのだった。」また、兄姉は自分が成しえなかった望みを末子に託し彼を励まし期待をかけるようなこともある。「1番上の兄が特に可愛がってくれ、偉くなるように勉強しろと色々と便宜をはかってくれた。この兄の影響で自分は偉くなるのだという信念をもち、いくらいじめられても涙を流したり抵抗せずに忍耐強くした。」一般に末子の進む道はすでに兄姉達によって開拓されており、常に親や年長者の保護があるので大した苦勞もせず成長していくことが出来る。彼は兄姉の刺激や指導で早くから字を覚えたり早熟になったり、或は学校においても兄姉の後盾のもとに

中心的人物となって威張ることも出来る。しかしあまりに依存的すぎるとそのささえが全くなくなった時末子は独立心がなく不安で空虚でみじめな気持ちになる。「小学校では目立たなかったが、級友間には人気があり先生からも信頼されていた。これには私の姉や兄の存在が大きく影響していたと思う。1・2年の間は兄や姉の影響で勉強などしなくても成績は一番だった。」「大学へ入学し寮生活をするようになったが孤独で淋しさに耐えられずK市へのがれていった。」「集団疎開でも一番最初に家に帰りたいと言って泣き出し脱走してしまった。」しかし兄姉達から適当な良い刺激を受けて自分の能力を発揮する末子も少くない。そこには過保護にならない程度の親密さが必要であろう。「5・6年では勉強の成績も大分良くなってきた。その原因はすぐ上の兄が中学生でどっちが成績がよいか競争していた為かもしれません。6年では級長になり『起立』『礼』の号令をかけていました。」「兄は未来のことや文化思想などを語り、私の心に新しい息吹きを吹きこんでくれた。」

しかし、また末子は中間子と同様、兄姉達の圧迫を受け、又、第三者からも比較の対象とされることが多い。それらが重荷となって、苦しんだり反抗したりする場合や、引込思案や、内向的になったり劣等感をもつようになる者もある。親が同胞を比較して一方をほめ一方をけなすような場合は出生順位の何れかにかかわらず、同胞間に敵対心が生じ、根深い嫉妬心と対抗意識をうえつけ、本当の愛情のない、冷いものがその底を流れているような同胞関係になる危険性がある。「教会でも学校でもいつも私は兄に比せられてだめな弟だった。今でもそうである。しかしなおつらいのは勉学上のことだった。兄も私も同様に理数に弱かったがとにかく兄は努力して相当やったという。だが弟は小説ばかり読んでいて一向努力しないといわれた。そういう反動も手伝って、私は詩や小説を書いたりしていた。そういう方には自然と身が入った。」「学校で知能テストがありその結果私は157で非常な才能だということになった。今まで私に重きをおかなかった教師達が急に違った目で私を見るようになった。家では母が『あの子は

足し算や掛け算が兄よりも良く出来る。』と公然といい、事実そうだった。そのようなことから兄との間に深い溝が出来、まともに顔が合せられない気になっていた。」「僕の記憶は大体5才頃、父に連れられて〇市へ遊びに行ったことから始まる。その時父は小学校2年になっていた兄だけを可愛がり僕を旅行中叱ってばかりいた。そして兄には立派な模型飛行機を買ってやったが僕には何も買ってくれなかったので家に帰ってから泣きだした覚えがある。兄姉は8人いた。しかし1番上の姉を除いては兄姉達と全然親しみを感じることが出来なくなってしまった。」

家庭において常に最年少者として保護され支配されている末子はそれに甘んじていながらも一方では人に頼られたり責任ある仕事を与えられたりあるいは人を支配したいと考えるのである。したがって、末子がよく幼い子供や赤ん坊を可愛がったり、何か仕事をいいつけられた時不安を感じながらも自分一人でやりたがったりする。そして彼はこれらの仕事を通して次第に自信をつけ独立心をもつようになるのである。「私は小さな子供が好きな性質でよく可愛がってやった、自分が末子で皆から子供扱いされているせいか、小さな子供を妹のように可愛がりたくてたまらないのである。」「長兄が山で遭難し母と姉とが現場にいて留守になった。したがって家には大の内弁慶の次兄と二人きりになった。心配して来る客の接待、日常の雑用を母や姉から教わらず頼らず初めて自分できりもりしたことが、また、次兄が私に指示を求めることが嬉しかった。私には結局自信が欠けていたのだろう。家でも末子だからと何んでも大目に見てもらえるし、甘えたから自然に依頼心が出来ていたのだろう。しかし私が生まれて初めて親をはなれて生活したこの経験、試練には感謝している。」

以上、自叙伝を通して同胞関係を子供がどのように感じ、そこからどういう性格を身につけてきたかを見てきたが、これはごく一例にすぎず、すべての子供がそうだというのではない。性格というものは前述したように様々な条件が複雑微妙にからみ合い、作用し合ってつくられるものであってある一条件において一応の共通性は考えられるかもしれないが、人間の

心理的環境は1人1人が異っているものであって、そこからつくられてくる性格もしたがって人の数だけ変化性をもっているものである。人の性格が個性と呼ばれまた古くから「人さまざま」といわれるのも、これをさしているのであろう。

IV ま と め

自叙伝を出生順位にしたがって、長子、中間子、末子の3つに分け同胞関係のあり方とその性格形成に及ぼす影響について具体的な例を通して考察してきたが、そこから一般的にどのようなことが考えられるであろうか。

夫婦の愛の最初の結晶である長子は、周囲の祝福と喜びの中に育てられ、両親の養育に不馴れなことも手伝って神経質に過度に手をかけたり、甘やかされがちである。長子は常に家庭の中心的人物であり、家族の関心の的であって、その保護の下に成長する。彼にはどんな我儘も寛大に許され愛されることが当然となる。したがって内弁慶で依頼心が強く独立心が欠ける。このように育てられた彼が外に出て他の子供と接する場合、彼が家庭で扱われている様には誰もしてくれない。しかも独立心がないため大いにとまどい、子供達のグループに入っていくことが出来ず、自然に孤立していき非社会的になりがちである。

しかし、このような生活に終止符のうたれる時が来る。即ち、次子の出生により長子は家庭の王座からの退位を余儀なくされ、例え一時的であっても家族の関心は新生児に向けられる。この場合多くは親の適切な教育により新しい遊び相手の出生を喜び、珍しい赤ん坊を可愛がるようであるが、一方、今まで自分に集中されていた家族の関心や特に親の愛情を奪われたことを淋しく思い嫉妬を感じる。親以外の者から十分に愛情を得られる場合はそれほど問題にはならないが、長子はしばしば退行行動により失った愛情や地位の回復を企ったり、それが成功しない場合には次子に対する嫉妬を根深いものにし、親を憎んだり、後の同胞関係にも親密さを欠

く様になる。しかし、次子の成長にともない家庭において、兄姉として、安定した地位や特権を得、長子として尊敬されるようになれば、幼い頃の依存的な生活から脱皮して、家庭における役割や責任の増加とともに兄姉意識は昂揚され、弟妹に対して先輩としての指導性を示すようになる。この結果、支配性や優越性を積極的に表わす場合と、過度の兄姉意識のため、親に心配をかけまいとして自分の感情を素直に親に打ち明けられず内省的になり、また常に年長者としてふさわしい行動を要求されるために意識的にも無意識的にもその行動に用心深く慎重になり、それがゆきすぎれば臆病や神経質や苦勞性などになる。これに愛情に対する欲求不満や嫉妬が加われば家庭内において孤立し、陰険で冷酷な性格をつくっていく。

又社会に出ても家庭内での特権をそのまま適用しようとして、我儘になったり、誰よりも勝れようとして競争心の強い勝気な子になる。又すぐれた指導性を示して、リーダーシップをとったり、責任心の強い、いわゆる優等生になる。勿論、家庭で過度に甘やかされ、大切にされたりした場合は、外に出ても依然として我儘で依存的で独立心に欠け、非社会的になるものも少なくない。いづれにしても長子は家庭における特権と責任、それに附随する役割及び同胞関係における兄姉意識にその性格形成の基礎を有していると思われる。

中間子は最初から長子とは異った環境に育つ。彼にはすでに長子という身体的にも精神的にも優れた年長者がある。したがって長子の圧迫と彼への追従のもとにその生活は始められる。又親はその養育に当っては長子の時の経験を生かして過度に手をかけることなく合理的に、能率的に時には放任的にさえなる。長子との関係は親の愛を媒介とした対立関係からはじまり、しばらくは中間子が親の愛を独占することは出来ても次の子供の出生によって、その愛はすぐに奪い去られる。したがって、子供の愛されたいという欲求が十分に満されることはなく、この欲求不満を解消するために親や他人に認められ、愛されようとして人の注意をひくような行動をとりやすく、又自己主張を強くする。それでも満されぬ愛の欲求は、中間子

の自由な地位と責任に対する気易さも加味して彼を外の社会へ追いやる。彼はそこで家庭における圧迫と欲求不満による緊張から解放されて羽をのばし、他の子供達のリーダーとなったりすることによって鬱憤を晴らす。したがって家庭の内と外とでは消極的と積極的という極端な行動を示すことさえある。しかし、積極的にその欲求不満を解消しえない者は愛を求めて空想や読書の世界に閉じ籠ったり、あるいは同胞に対する嫉妬を強く持ち、この場合親が適当に中間子を認め愛してやらねばその嫉妬は根強く継続し片意地や陰険で自己主張の強い強情張りや、自分が愛されることのみ執着する自己中心的な性格をつくりあげる。また、同胞関係においてもその中間的な地位は役割、権威、責任等において子供を精神的に不安定にさせる。すなわち、上と下からの板挟みになり、どちらを向いても頭打ちであり、また、どちらにもつけるという自由さがかえって家庭において中間子を不安定にさせる。中間子はその進んでいく道を、長子によってすでに開拓されている方向にばかり求めて、常に長子に追従していくなれば、長子と一緒に背のびをしながらも早くから色々な知識を得るという得点はあるにしても、兄弟に依存的で独立心に欠け又責任感のない者になりやすい。一方中間子は常に長子の圧迫のもとにあり、第三者からは比較の対象にされる。したがって彼は長子に追いつき彼を追い越さんと欲する。家庭においても自己主張を強くし、長子と同等に扱われようと背伸びをする。しかし、能力の差は或は両親の態度や扱い方等によってこの優越しようとする欲求が不当に抑えられた場合、彼は劣等感を抱いたり、兄弟を不当に批判したり、嫉妬や憎悪するようになる。又、自分の満されぬ欲求のために弟妹をいじめたり支配したり、逆に極度に可愛がったりする。しかし弟妹は常に欲求不満のはげ口とはなりえない。弟妹の優れた能力や親の保護のもとにある勢力はしばしば中間子にとっては威嚇であり、嫉妬の対象となる。時に中間子が内気、臆病、意気地なし、非社交的といわれ、あるいは、勝手、努力家、強情、社交家といわれ、又、横暴、陰険、嫉妬深く劣等感の持主だとか、世話好きといわれるのはその地位への適応の仕方の多

様性による。すなわち、中間子の性格形成の最大公約数は愛情の欲求と自我拡大の欲求及び自我優越の欲求に求めることが出来る。中間子がすなおにのびていけば勝気で努力家で独立心が強く、社交家の力強い性格を形成していくことが可能である。

末子は出生した時すでに年長の同胞がいるというところは中間子と同じだが、年下の同胞に一旦独占した愛を奪われることがない。彼は常に家庭の中心であり、年長者に保護され甘やかさられて育つ。親もその養育には厳格さを欠きがちである。したがって、末子は自ら依存的となり、我儘で依頼心が強くいつまでも独立心が出来ず、スポイルされやすい。年長者からちやほやされて色々なことを教えこまれたり、真似をして覚えたりするのでおしゃまな早熟な子供になり、常に自分が人から愛されているという満足感がなくてはならない。したがって家族やよく知った人で彼を認め愛してくれる人には積極的で人なつっこく快活に振舞うが、同じ様な子供同志のつき合いでは常に中心になれるとは限らないので引込思案や臆病で恥しがったりする。愛情の欲求を十分に満されてきた子供は他人に対しても愛情がこまやかであり得るがあまりにスポイルされてきた場合は愛情の独占欲が強くなりそのため対人関係においても支障を来すことがある。

末子の進む道は兄弟達によって開拓されており、彼等の指導と保護のもとに順調に歩いていくことが出来るが、あまり依存しすぎ頼っていけば独立心を欠き意志も弱くなる。しかし、兄弟達が良い刺激になれば、その素地が兄弟達によってならされているだけに、努力しだいで自分を十分に伸ばし、兄弟達をしのぐようにさえなる。

しかし、末子は常に年長者の愛と保護のもとに育つとは限らない。反対に親は末子であるがために手を省いたり、兄弟達は親の愛を奪われた上に自分達の責任や役割がふえることを嫌がって末子を邪魔者扱いにしたり、支配的に横暴に扱うこともある。この場合、末子は兄弟達の圧迫や嫉妬を受け、又、彼等との比較の対象にされる。したがって、彼は勝気に自己主張をし、独立心をもやし外の社会へ発展していくか、あるいは、劣等感に

悩まされ内向的や孤独になったりして、その同胞関係はいきおい冷いものとなりやすい。

要するに同胞関係は、親の愛を媒介とした競争、対立、嫉妬等と出生を共にする同胞愛の共存であり、同胞の出生順位が親の子供に対する態度を規定し、それが同胞関係のあり方、ひいては子供の性格形成に重大な影響を及ぼすのである。又、出生順位によって家庭社会における地位が決定され権利や、義務や責任や役割等が規定され、子供の社会性の発達に重要な基礎を与える。いづれにしても子供の素直な性格形成には適当な愛情の欲求と自我拡大の欲求の満足が必要であり、きょうだいの夫々の立場に応じて、その欲求不満を上手にコントロールし、緊張を解消してやることが大切であり、ここに親の子供を扱う態度の重要な意義が存するのである。換言すれば子供一人一人の立場と能力に応じた親の態度の公平さということであって、これが同胞関係のあり方を強く規定している。(岡部弥太郎一本学教授、若林忠一第5期卒業生)

附記 本論文は1961年社会科学科の若林の卒業論文の後半が骨子となっている。そこに岡部の集めた自叙伝が資料として用いられ、岡部の若干の指導によって出来たものである。若林の論文の前半は多くの文献によって性格形成と同胞関係をまとめたもので、前後あいまって、社会科学科の優秀論文の一つとして表彰されたものである。

Sibling Relations and Personality Development

(English Résumé)

Yataro Okabe and
Sunao Wakabayashi

Among various factors operating upon the process of personality development, the family relations are considered as most important. Home, in general, consists of three kinds of human relation—husband and wife, parents and children, and sibling relations. The relationship between parents and children is characterized as the personal interaction of independent and dependent, or protecting and protected, persons, whereas the relation between the siblings is regarded as one of equal status. Therefore, a home provides therein opportunities of exercising the equal human relations as well as the dependent human relation, both of which will be practiced in society later. Sibling relations thus have an important meaning in the development of children's social life, i. e., a path of socialization from the complete dependency on parental protections to the independent life.

The basic characteristics of sibling relations are featured as peer relations of the blood. Thus, the relations include both affection and antagonism of siblings and are influenced by various factors. For example, social and cultural factors and family structure, such as a number and sex of siblings, their birth orders, age differences, etc., should be taken into consideration. The most important factor, however, is psychological relations among family members, especially the attitudes of parents toward their children. The over-all mode of sibling relation, whether cooperative or competitive, seems to depend on the parental love.

The present study tried to investigate the effects of sibling relationship on personality development by analyzing real description in autobiographies. Among autobiographies written by students of

five universities and collected by Okabe, a sample of 100 was chosen at random by Wakabayashi. The latter divided them into three groups according to the writers' birth order, i. e., first-born, middle-child, and last-born. The specific problems raised and answered in this study are as follows: how the child is treated in his family, particularly by the parents, and what position, responsibilities, roles, etc. are given to him according to his birth order; how these roles affect the sibling relationship; what attitudes and behaviors he learns in these environments with regards to the kinds of mechanisms of adjustment he makes; and what kind of personality he attains.